

貞丈雜記

十二上

五二〇〇番

庫	文	閣	内	
一五三函	一四二二	和	書	
一七架	二四二二	類		

庫	文	官	政	大	
三二	一〇	和	書	門	
二	三八	冊	架	函	架

内閣文庫	番號	和 11422
	冊數	32 (23)
	函號	153 287

禮刊



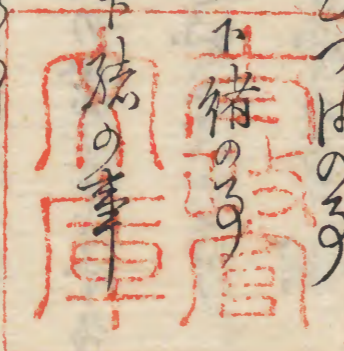
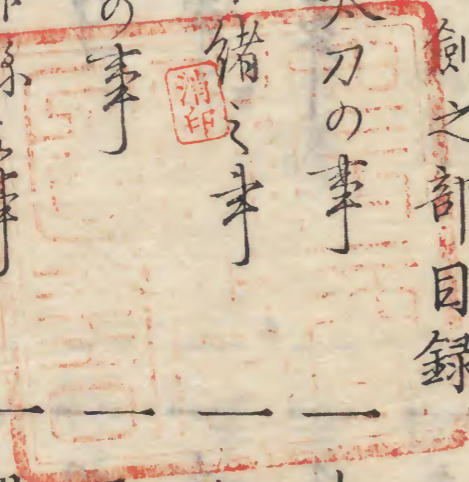
貞丈雜記卷之十二

明治十二年購求



刀劍之部目錄

- 進物之太刀の事
- ひきあへ下緒の事
- 半下緒の事
- 太刀刀作採の事
- さや
- 少刀の事
- かんたたり帯取の事
- あかむつはの事
- 鎌倉上緒の事
- 二重下緒の事
- 刀引の事
- 腰刀の事
- 煉髹の事
- 公方採り少刀の事



雜記十二

目一

- 兵庫鐔の太刀
- 帯取寸法下弦寸法
- 鯉柄の刀
- 後三年画のさや巻
- 赤刀のり
- 守刀の事
- 尻鞘の事
- 細太刀
- 太刀もきやう
- 丸鞘の太刀
- 刀の銘菊の紋
- つのいた刀
- 長伏輪の事
- 犬もねきのり
- 刀ハ袴の帯もきやう
- まちさや巻のり
- 尾せきふのり 図
- 鳥頭太刀
- 刀劔研の事
- 脇差の事

- 脇差の太刀
- 銀劔の事
- 甲州武田家鞘巻
- 刀のわうまい小刀のり
- 葬礼の腰刀
- 佩太刀といふもの
- 中世太刀 大太刀
- 草巻太刀
- 本阿弥の目利のり
- 今世の刀脇差
- たんひらね
- 錦包の太刀
- けぬき形の太刀
- 書之抄度ハ劔のり
- 帯取のりといふもの
- 小太刀 大太刀
- 糸巻太刀 武太刀
- 黒太刀 白太刀
- 劔相のり
- 今世の太刀

雑記十二

目二

- 一 白きうちとくこの太刀
- 一 雪の下帯取
- 一 三所の事

武藝之部

- 一 醉拜之事
- 一 賭射之事
- 一 馬上のニッおの事
- 一 歩射 騎射
- 一 的の繪の事
- 一 養目の事

- 一 刀の志みの事
- 一 透鐔の事

- 一 流弓場始之事
- 一 大具足射の事
- 一 歩立のニッおの事
- 一 奉射之事
- 一 鳴弦の事
- 一 籠的の事

- 一 數塚の事
- 一 的の徑の事
- 一 流橋馬は三流ある事三ノ美
- 一 さくらりの事
- 一 式に大的 涉所の
- 一 射つけのふ的 つご
- 一 相撲之事
- 一 笠を持との事
- 一 おんもの射の事
- 一 笠掛始りの事
- 一 かけを刀せとの事
- 一 的は鬼の名書
- 一 遠笠懸小笠掛
- 一 矢代名圖
- 一 矢沙法 どうゆひ
- 一 馳引との事
- 一 逆羽圖
- 一 犬追物の事四ノ条
- 一 犬追お始との事
- 一 矢筈の事やう

- 一 軍陣の対策をえたる
- 一 神佛をせたる
- 一 矢目の事
- 一 押手薙手之事
- 一 弓杖の事
- 一 十列之事
- 一 騎射の事
- 一 奉射の事
- 一 古く大将自ら働る
- 一 首を鞆に付る
- 一 軍陣日取方角之事
- 一 軍之吉凶の事
- 一 ねづの事
- 一 中附古今の遠
- 一 競馬の事
- 一流福馬の事 四ヶ条
- 一比射、初は再無の事
- 一 飛道具の事
- 一 生首死首見分
- 一 凱歌の事

- 一 馬上の作物之事
- 一 三、九手掣
- 一 弓持る事とあけや事 國
- 一 神事百の的
- 一 狩とる事
- 一 大糸と突との事
- 一 ころがりの事
- 一 矢の事
- 一 打毬の事
- 一 式に大能多弓太所
- 一 鞆ありの事
- 一 箭と睡の事
- 一 箭かきのお射との事
- 一 狭物の事 品
- 一 甲陽軍鑑の事
- 一 中物の事
- 一 追手狩の事
- 一 的おきの事

以上

一 伊勢真友
一 千賀春城
一 岡田光大
一 伊勢真友
一 千賀春城
一 岡田光大
一 伊勢真友
一 千賀春城
一 岡田光大
一 伊勢真友
一 千賀春城
一 岡田光大

真丈雜記卷之十二

刀劍之部

一 旧記又涉太刀 金濟太刀 金覆輪 ありあり柄鞘の金具

皆金さし入りありて元ハ真の太刀之東山御代應

仁の大亂以後世の中貧乏ありし其真の太刀を道場より

取りしれありて多くハ作り太刀を用ひたりされし金

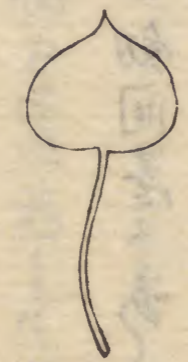
又ハ金覆輪ありて多クハ昔の如し又ハ太刀白とありて

永正家中竹馬記
三云太刀一勝 糸太
刀一振 金ありて
あり糸ハ糸を
糸ハ糸中 金と
金ありてんを云
心ありと云
○伊勢因幡守一
冊云太刀一勝と
書くは持の
字ありてんを云

流の町のりのり
 一又武雜書
 礼部云云流の
 太刀持と云

根作り白太刀の多しは太刀黒とあるは志やどろ作り
 黒太刀の多し又流太刀系と何のハ系巻の太刀の多し柄を
 巻る太刀之又流太刀持と何のハ系巻の太刀之系巻をれ
 とり自分の持料しる流の太刀之と心之澤吳阿の
 覚書は太刀令代或百疋と云其下は柄云金とい
 金く見の多し麻おあるは太刀見は又系とい系巻
 とり何のりつうは太刀の多しを云と
 志と云はばはは染流と書くは染ハ條の志と云の
 ゆくいひびの形丸く細の病之丸き形の級を石餅と云
 目 一 染の多しハ飲食
 の形と云

一 あらひつと云ハ葵を四ツ葉合せうりやある形之丈木
 抄六帖題信実朝臣かうハささきと云ハやハあるあはひつと
 こころありと云ハつと云



一 志きめ下結と云るハ融華記ハありひきめ皮のさけを
 也貞衡云ひきめ皮と云ハ黒くぬりたる草ハ赤くは
 ひきのやうある結を書くを云

一 藤倉下結といハたの下結のこころ系とて組こ一方ハ
 こころを付つるを云布衣記と云書ハ何の系ハササキ
 下結と云云

と云又赤刀は對して赤いさ刀とも云

一 少刀ナカゴの名古よりあり義貞記に云小刀ハ長サ六寸中子
三寸ケヌキ形ナルヘシと云元たり是腰刀也若腰物皆
同しおこせ母扱さぬとも一尺を隔るとす之柄ハ鯨の
皮のけし柄もあらずもあらず自費之つげ入れせとやあつ
ては切りしとの世の少刀ハ柄をまさき端を入れたける
甚長くも由ナカゴ古の少刀といハ大に遠たる物也

一 煉チリツル端といふ柄あり草の端に柄あり草といふは草の上は
柄あり柄を付んかめしと云澄りも柄あり草を用とて柄あり草
のつぎといふるを畧して柄あり端といふ也

一 かんたりの帯取といふは異國より傳りたるかんたりのといふ
織物をこゝみにけて太刀の帯とりは是をかんたりの筋
を織る物之今のせんといふ物のやうある柄之筋ハたゞ
筋もあらずもそのまゝの帯をさすは石定さ
おしととも古き切也の帯は強りともさすれをかん
たりの帯といふ也近代阿蘭陀より傳りてはさすとも
柄ハかんたりの物也漢嶋と書くといふ手織はあり
たるもありとも

一 太刀の帯とりは結ひやうの古ハ二系より外ハありカハん
たりのおひとりハ端をおてまもたたくがくの帯といふ

端を折らざるに引通し 酌英記に見えり 曾我流

大岡秀吉の家臣 又左衛門の流儀あり 上中下の結紐又ハ神納婚礼

木の結紐あり 古ハゆげむつらきなり 只二色

一 公方極は赤刀 兼は太刀と也 袋は入たる由 袋はゆき字 袋

一 冊後書は見えり 赤や袋をきくろとも云 字五枚

書あり 赤や袋とハ鞘ハ綿をきくねいふむを之極

綿をつつらむらぬをうまのうまかけぬひらみそ目貫

をハ綿の上と云えつらふをまぐし 我家の寶小鳥丸

の太刀のうらら 應仁年中ハ細うらと云 傳ふさや袋

へうらちまのうらと云 神也

一 ヒヤウコグサリ 兵庫標の太刀と云 柄ハ鞘ハ根ののりありと云え

おひらりハ根のうらを付てハ刀 劔同字ハ 珍重をあらわ

せうは太刀を兵庫標といふハ 禁裏ハ 甲冑弓矢太刀

ありを細りあるハ 此花を兵庫といふハ 兵庫ハ兵庫

寮といハ 役を我の内より 其兵庫の奉行を

兵庫ハ 兵庫助ありといふハ 兵庫寮といハ 役

屋敷ハ 兵具を作る細工人あり 其細工人の作りたる

を兵庫標といふハ 細工上手あり 此是を愛 既中ハ 標ハ

下手の作りたるハ 切れとあり 此上手をあらハ 作りと云

一 いろもの作りたる太刀ハ 根つらと云 此はうらを 通し 下

一ひらきまゝにしてよるゝ一まゝ

一つのは太刀と云いつのはあゝまゝ太刀と云ふも之を元来はまゝこ
との太刀を道あるゝたれども應仁年中の大乱世上にありし
ありてつのは太刀の始りたるを私刀記に云伴勢や総者
真牧の記に目録に
太刀の銘を付る多し勿論に持太刀あれは一腰の刀と云ふ
持と付は又糸巻を是れは是も一腰の腰に糸と付は又
金づくまゝあれは金とまゝ付は銘ある太刀は必銘を認む
たゞそれ以下に於た方々も是れも銘にハ手は持と付は又尚阿
まゝのまゝひらつゝひ太刀を所持と付は次は糸巻といつゝひ
太刀よりまゝにひらつゝまゝのまゝといはれりまゝといつゝのまゝ

をいたのゆく程は是れ帯に於つゝひ太刀のゆくまゝは是れを
糸巻と申す又金づくまゝの太刀と申すは名をとりまゝといはれり
つゝを只もけぬりて帯に取らば紙をたゞは仕ゆりまゝとい
まゝをまゝ一まゝは是れを一方極に進上といふ

一ヒシリツカ聖柄の刀の源平盛衰記五の巻同六の巻は清盛入道聖柄
の刀を云ふれはまゝといふは聖柄の源平ありは其丈按るふ
刀と云ははまゝといふの刀はまゝの柄ハ般の皮をうけて放
目貫又まゝをうけてまゝ唐木ありて作りしは柄も
まゝといふ其まゝのまゝを聖柄と云成へは法師のま
まといふまゝと云刀の柄はまゝをうけては坊主の髪ありまゝ

盛衰記卷十三
大臣情ノ余太刀ハ
長覆輪ナリケル
錦ノ袋ニハラレ
タリ云々東鑑卷
廿五ニモ見タリ同
廿九銀長覆輪
野劔云々

あるを云れ又按鯨ハ魚の皮之魚を用さるハ持道之依て
柄といひれ傳ありす

ナカフクリン
長伏輪の太刀と云物盛衰記卷二十
石搦 合裁 是れ云々

常の伏輪の太刀ハ洋ハ勿論伏輪有鞘ハ之季の方より
よせ鞘の中は引ありぬハ之ハ引の
分程あり志ハ引ハ引の方の
たるを云々

後二年の陰は元元と云々其の圖九の如し



是ハ大折袋ト云り袋の馬相度の新記也
兄合
ぬばこをまけて合をまきたる新記也ハ腰はさきと云
時こまりのまきたる新記也ハ引かりと云はるぬけなる

東鑑云寛元二
年四月廿二日奈御
刀鞘卷有下緒云
々御刀サマキトハ
サマニキサミメアル
サマ卷ヲ云フ下緒
アリトハ凡サマキ
ニト緒ヲ付カルハ
ナシ然ルニコトニ
サゲテアリト断
ヲ記セルハモシハ

一 其の巻の刀のこまりに穴を明け草を中緒とに細くた
てかのあま引通し中緒の如くむきひて結ひ余りをも
して切て下けおきぬまきと云は是ハ澄きと云はる
て下緒一筋犬もぬきの目も通してと云は筋の中緒と云合
結ひぬきと云ハ刀をぬき時をよみにぬけて出せる柄は
常と云はるくさきの為又犬もぬきと云は、鞘卷ハ腰
さして下緒を帯は通してさきを一巻まきひて結ひぬ
きも刀をぬき時をよみやを帯はと云はるくさきのぬき
と云は名祿古きと云は元元比けもの古ハ何と唱へて
新臣のさきと云は、新記ハ細き草緒を付く今犬もぬきと

此下緒トアルハ
犬マ子キノ車ニ
テモアルヘキ故下
緒ノ事ヲ云ヒシ
文ニテハナキニヤ
可考

ハハ是之或説は犬すぬき二尺片一尺マ一尺の而七寸斗を
後ハ余り二寸五分斗あり一藍皮之草を裏とらを合は
しを縫ハぬ之又云犬招幅之先ハ少ひらうあり一藍草是
草のうちヤ結と同一をあり

一 ウチカチ お刀ハつををいへる長さ刀の多しお刀をバつむ刀をいへる宗

一 五一冊はありお刀ハつのを巻く今大トテサス 其大ノ事ナリ

一 刀をバ袴の帯よりすへ蜻川記より

一 守刀古のころハ拵の多義経記志也ま王殿くは浦出の糸

一 玄紺地の綿義経のちさか名はつとや包いへるお刀と云 是義経の 又お我

一 物後まこま祐経は連一糸云赤地の綿はつとや包いへる

守刀ハ懐中
ニサス也即ワキ
サシ也ワキサシヲ
隠劔ト云也懐
ノ中ニ隠シテサ
スユヘワキサシ
ト云ハ即守刀
ナリ

おりの刀とま包いぬと云も巻くると云も同一なり
錦をまきせくかへて纏ひくると云

おりの刀ハ懐中よりおあふおあふうまハ
まきおりのまハハさうつのもまの 又義経記衣川合戦の糸

鞍馬の別馬義経の幼少の時小坂治のおる 紺地ノ錦ニワカ
おの刀を糸

ら サヤ巻タルハ即守刀ナルベシ 長サ守五寸ありし中尾を秘蔵して西國の

合戦の時澄の下へささせると何う澄の下とハ澄の

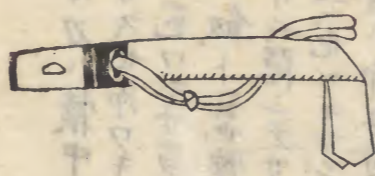
めところの肉をさ大納言行成領ハ実方朝臣と口傳

して冠をおおとさね一冠取てめつてお刀のめい

お出してびんを揃あせられといふ事 一条撰政兼良公作
時元記より

守刀にめいさいをもさす物 お刀ハハかうかい斗
さすこ小刀ハさす

夫木抄衣笠内
大臣いまいり
すてーまぬん
あうまのさ
も心よあめけ
いさハ
目権信公相
あゆののさけ
まゆののまゆ
さゆの虎の尾
わてあゆの世
○んせさゆの思



一 ますちさゆはきと云ハ木素合の鞘表を云しすちハ待の字

也武具部すちののの不ハ委く記也

一 尻鞘シリサヤ又シシガハ虎の皮豹の皮熊の皮麻の皮あてて袋を

作て太刀の鞘はあてを云く太刀のさや両意ハあハ温気ニツナ

して太刀さびる有毛皮をかけてるを云く

一 みせを云く云ハ短き腰刀よ云き鞘袋をうけて云き刀

さゆを云く心ある下しされとも腰刀短き前鞘のえおる

あり夫木抄正三位知家々云ハ「ハ」しゆりまを

まゆともんせさゆのさまありうけておるやたうまを

先大田んせさやハ綿まく作りお指を末まを鞘尻を
とん不改く切て二枚うせりま上の馬のぬり

一 ホッダチ細太刀の多野官宰相定基派云ラデンを螺鈿ササギ文ヲ入ルナリ鞘ニ者見テコキエケシ將給ササギ文ヲ入ルナリ鞘ニ

前給ラシタル之右 皆細太刀の儀刀本刀の執りし真劍ササギあり

らすあまのまして作りたるをゆき儀刀と云た威儀に

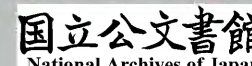
まろう備をも云 威儀は備るとハ 实用は何す威儀の為す

まゆ。あまのましをみまをばそく作りに依て細太刀といふ

あり一 新六帖信実朝臣の款ハ「世の中を云く心も

あま太刀のさやいさありうつまりまら魚きハ赤の心世の中のまを

さやハ一帯は思きるすかかつりしもあつりしとハ思ひはまは心細太
刀を心もさやハひらけりまやハと云ハさやハのまをひらきを
太刀のさやハひらけたりまらくとハ一帯はとつらるるハ細太刀のさやハ
はらふとあるをれまをへてまらくとハハハハハハハハハハハハハハハ
つらりまらるるハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
まを作りて入かるとハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ



ズリユルギノ糸
ノ所ヲ糸ニセズ
漆草ニテスルヲ
太刀カケノ草ト
云也太刀ノカ、ル
所ナリ

草とて腰刀といふ物を作りてかく程の腰刀引付て置く
是ハぬくよゑし一腰刀の事ハ武具の類ニ記せん人考へて又
曾我物語卷六五郎大政一帳巻をとり入ひむごの事も
とらてひつのは伊東重成の四尺六寸の志やうどう作りの大刀
十字字にむきひしは云く是又うさけたる也

一 鍛冶の上子の赤くも名作の大刀刀ハ奇妙石思儀なる事
あり切れの事ハむいのみ及ぶる事ハ然るも名作といふ切れ
ざりも有りテ奇妙石思儀もあまも有り是を扱々大村
加トウ著一たる書刀劔秘宝云鍛冶場を清らるるハ
古昔天國以来上々作れ何れも教の如く扱する之也

太刀ハ靈妙あるを珍る中夫悪事災難を遁るへき物あり
然るを研トキヤとて研ヤロラカ道具かゝるは依て已る夫を以てあがり
不も多有り亦一日かゝる亦二日かゝる依て皆あがる也然
中々研ワカの隙あるをさぞおぼろが玉の立つ様
よ淋ワカ一期ハ五夜も三夜もかゝる為を研を深遠迄
扱サひ入る耐ハ必淋揚をうけ扱サ之上作大燗又の道
具亦備あおるは切れの要きあがり皆此の如く研をの
あがりたる故に左具ありてあがり不切也古刀の上作ハ胴
の心能く落るハ希也皆研をのあがりて日本ノ名物

の道具皆焼く之代^{シヨ}々付けハ名物と思ふ人あれども
左様といふ鳴呼あがらる先の名物ありとい言候を
終^レ筆も尽まるあ^レの^レ今ハ名斗名物を道具ハ
名物といふ^レ相^レあ^レ上作の昔の地^ダ虜あ^レま^レ皆失^レる^レ
悪^ク情^ナあ^レき^レう^レ名^レ人^ノ焼^クあ^レあ^レ火^ヲあ^レり^レぬ^レる^レ依^テ
靈妙不思^レ役^ナあり^レたる^レ太刀も^レ何^レの^レ靈妙^ナあり^レ古人^ノ焼^ク
この^レ空^ク火^ヲ成^レあ^レり^レぬ^レと^レ焼^ク又^レ時^ニ焼^クあ^レる^レ火^ヲ
又^レ後^ニ火^ヲあ^レり^レぬ^レあ^レの^レ焼^ク又^レ時^ニや^レき^レこ^レの^レ火^ヲ扱^ク
火^ヲあ^レり^レぬ^レと^レ名^レ也^ノ名^レ人^ノ鍛^ク火^ヲ焼^ク又^レ焼^クあ^レる^レ
刀^ノ魂^ヲ皆^テ何^レの^レぬ^レと^レ靈妙^ナ不思^レ義^ナの^レあ^レる^レも^レ理^ナ也^ノ故^ニ

刀の心と帯る^レ志^ノの^レ心^ヲ不通^クして^レ靈妙^ナあり^レ予^ラ刀^ヲ脇^ニ差^テ百^ニ腰^ニ後^ニ
あ^レる^レふ^レも^レや^レ五^ニ六^ニ十^ニ腰^ニなど^レあり^レたる^レ見^ル
時^ニ情^ナあ^レり^レあ^レり^レぬ^レの^レ上^ニ白^ク燄^ヲの^レ心^ヲ正^シ身^ノの^レ火^ヲ
消^スて^レ後^ニ烟^ヲの^レ白^ク殘^リて^レ右^ニ焼^ク又^レ焼^クこ^レの^レ火^ヲ
火^ヲあ^レり^レぬ^レハ^レ子^ノ身^ノも^レ二^ニ千^ニ年^ニも^レ消^スる^レ又^レ焙^ク
空^ノの^レ消^スる^レ道具^ハ石^ヲを^レ以^テ火^ノの上^ニを^レ打^チ火^ヲを出^シて^レ見^ル
れ^ハ火^ヲ不出^ル是^レ火^ノの^レ消^スる^レ故^ニ自然^ニ出^ルと^レは^レう^レ
と^レて^レ黄^クを^レあ^レり^レぬ^レ又^レ焼^ク又^レの^レ強^クき^レ道具^ハ火^ヲを
出^シて^レ見^ル一^ニ火^ノの^レ燄^ヲも^レ能^クき^レ火^ヲ出^シて^レ又^レ紀^ノ別^ノ言^ヲ
山^ニ一^ニ燈^ノの^レ火^ヲ消^スして^レ山^ノ繁^ク昌^ク一^ニ火^ヲを^レ炊^ク飯^ヲを^レ食^フ

辨は納る耐ハ善根は成るあそく云武士ハ今古き火五百
 年手手逆の火ハ不持もるあふ火とハ知れど刀服を
 むらう心持る之刀をあら之或ハ越る耐ハ野あふると云ハ前記
 其如^{ヤキカ}焯をや耐^{ジユモン}根治場をきよめ^{シユモン}補文をとあ刀の魂は情
 火を焼あきぬ之亦様を忌む之常の疾ハ大あ踏ん
 とまれも野あふは是れ大切あは候を研をうみ火を
 消され靈妙もあへ人を切りても切色は硬き^{カタ}拍を切れハ
 或ハまじり或ハ折る毛火の消しは悲しき計名物の道
 具あふも^{以上}刀劍秘室の文之者の刀劍秘室を記し
 後ハ松平越後守の家臣とあ越後あ波高の首又浪人と候ハ江戸
 浪地あは在位も元来武士と云浪治の工匠ハあは生播刀を

●のー付太刀と
 云ハ柄鞘とに
 合のうもつねを
 ので包いりし
 くののー付と云
 ハ太刀のまきう
 ら身も合ま
 包いりし

公家ノ装束抄
 表裏共標
 色ノ衣ヲ圍花
 田ト云モ同意之

概の事をぬきし上とあゆり加トう渡る刀は生牛の首を一赤
 切居しけりとし加トうあゆる刀の編ハ作武士大森治於大あ耐号
 大村加ト慰とあり又越後幕下士大村加ト
 と何うて表ハ真十五枚甲伏作と云路も有
 マルサヤ
 九鞘の太刀の多太平記卷十二^{二家一統}兵庫彈の九鞘の太刀
 虎の皮の尻鞘うけたるを云同卷廿一^{陸谷判友}陸谷判友
 金作の九鞘の太刀一握多つふ^{陸谷判友}陸谷判友
 くれき同卷廿四^{紀州総門}紀州総門
 山軍ノ案 津津小次所ハ六尺三寸の九鞘乃
 太刀も括りうたり云九^{陸谷判友}陸谷判友
 九とハ一箇の多うし金作の太刀の鞘も也金作
 包いりし古書ハ金作の九鞘の太刀と何り只九とハの太刀
 と云ふるも何り同し也^{九とハ一箇之條ハ越後判友}越後判友
 記するめと云も同し也

建武式目追加員
和二十二三ノ沙汰
曰正月ノ祝亭引
出物事止重物
甲冑太刀刀類可
金銀類唐物類
用銀劔以下輕物
と云えたり銀劔
を輕きものと云ハ
金具ハ銀の焼付
にて履相よら
らみも名作は
ハあつても用を
ゆへに只礼式一
通
るは用を

を脇よ隠して出さる。右脇差の太刀と書く。右最勝
禁中より最勝王經を傳せり。右は時延曆寺と東大寺の傳物
之其以ハ乱世の傳物も太刀ありハ隠して持出たるを言はれ。抜
タキウチカタナ
太刀折刀ありのをも廣きとだんじり物といふたびら廣
云河を畧したる之太平記卷之二十二 神南合 山名 山名り郎等因幡
兵の佐人は福間之氏として母は名を知らざたる。太刀あり
七尺三寸の太刀だびり廣き作りたるを銜本之尺斗を以て
蛤齒よりき合せきだびり廣きといふ。太平廣あるへし
平く廣きと

銀劔といふ。銀作の太刀之上古礼式の道ありハ太刀銀劔
きつひり之。東鑑保平盛衰記平家物語鎌倉年中行

年ありえ元り正月は初の日又矣。開の時候食たり
人も銀劔。由東山殿年中行る。元其の記ありと云
今も將軍家は代始より大和武時代銀劔を執り
御ともこれハ白木鞘の刀に實の銀劔ハあり
は名をとりて古ハ銀劔と云りてと云。畧しと云。白
木鞘のより。執する年より。又式正の時
白太刀と 白太刀類 銀劔といハ同物あり
ニシキツミ
錦包の太刀ハ孫の鞘袋にけたる。太刀におも云ぬ。柄鞘
とも。に綿をうけ堅く纏く。て柄糸を巻き。より。其を
此より。小笠原長春記に主人曰。あり。馬の肘太刀をとり

又^{カミカキ}勁^{カミガキ}取^{カキ}とも書^{カキ}く之^{カキ}如^{カキ}名^{カキ}加^{カキ}美^{カキ}賀^{カキ}伎^{カキ}とありか^{カキ}ら^{カキ}ふ^{カキ}き^{カキ}を^{カキ}後^{カキ}は

わ^{カキ}ら^{カキ}ふ^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}ひ^{カキ}習^{カキ}たる^{カキ}古^{カキ}実^{カキ}方^{カキ}胡^{カキ}長^{カキ}い^{カキ}う^{カキ}ま^{カキ}り^{カキ}て^{カキ}筋^{カキ}を^{カキ}

以^{カキ}て^{カキ}行^{カキ}成^{カキ}頭^{カキ}の^{カキ}冠^{カキ}を^{カキ}亦^{カキ}首^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}行^{カキ}成^{カキ}の^{カキ}冠^{カキ}を^{カキ}亦^{カキ}首^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}行^{カキ}成^{カキ}の^{カキ}冠^{カキ}を^{カキ}亦^{カキ}首^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は

目^{カキ}は^{カキ}冠^{カキ}を^{カキ}取^{カキ}り^{カキ}て^{カキ}せ^{カキ}う^{カキ}ち^{カキ}总^{カキ}て^{カキ}や^{カキ}り^{カキ}か^{カキ}ら^{カキ}い^{カキ}ぬ^{カキ}き^{カキ}出^{カキ}て^{カキ}び^{カキ}ん

か^{カキ}き^{カキ}つ^{カキ}く^{カキ}ら^{カキ}い^{カキ}ま^{カキ}り^{カキ}て^{カキ}し^{カキ}る^{カキ}に^{カキ}は^{カキ}兄^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}ふ^{カキ}か^{カキ}ら^{カキ}い^{カキ}の^{カキ}髪^{カキ}

う^{カキ}る^{カキ}の^{カキ}物^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}考^{カキ}え^{カキ}る^{カキ}に^{カキ}か^{カキ}ら^{カキ}ぬ^{カキ}ゆ^{カキ}か^{カキ}ら^{カキ}い^{カキ}の^{カキ}用^{カキ}方^{カキ}

を^{カキ}知^{カキ}す^{カキ}て^{カキ}外^{カキ}の^{カキ}事^{カキ}は^{カキ}別^{カキ}に^{カキ}考^{カキ}え^{カキ}る^{カキ}に^{カキ}説^{カキ}ある^{カキ}に^{カキ}皆^{カキ}保^{カキ}て^{カキ}

一^{カキ}鎌^{カキ}倉^{カキ}将^{カキ}軍^{カキ}の^{カキ}可^{カキ}代^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}腰^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

い^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

一^{カキ}鎌^{カキ}倉^{カキ}将^{カキ}軍^{カキ}の^{カキ}可^{カキ}代^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}腰^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

い^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

い^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

い^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

い^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

い^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

い^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}は^{カキ}こ^{カキ}う^{カキ}い^{カキ}斗^{カキ}き^{カキ}せ^{カキ}小^{カキ}刀^{カキ}

一^{カキ}今^{カキ}世^{カキ}禁^{カキ}中^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}書^{カキ}の^{カキ}法^{カキ}府^{カキ}の^{カキ}所^{カキ}劍^{カキ}ハ^{カキ}豊^{カキ}後^{カキ}行^{カキ}平^{カキ}也^{カキ}

法^{カキ}代^{カキ}の^{カキ}先^{カキ}年^{カキ}研^{カキ}せ^{カキ}れ^{カキ}は^{カキ}研^{カキ}せ^{カキ}ラ^{カキ}レ^{カキ}ル^{カキ}先^{カキ}例^{カキ}ナ^{カキ}シ^{カキ}ト^{カキ}ガ^{カキ}

研^{カキ}せ^{カキ}ら^{カキ}レ^{カキ}ル^{カキ}先^{カキ}例^{カキ}ナ^{カキ}シ^{カキ}ト^{カキ}ガ^{カキ}イ^{カキ}カ^{カキ}ノ^{カキ}故^{カキ}カ^{カキ}研^{カキ}せ^{カキ}ラ^{カキ}レ^{カキ}シ^{カキ}ト^{カキ}

研^{カキ}せ^{カキ}ら^{カキ}レ^{カキ}ル^{カキ}先^{カキ}例^{カキ}ナ^{カキ}シ^{カキ}ト^{カキ}ガ^{カキ}イ^{カキ}カ^{カキ}ノ^{カキ}故^{カキ}カ^{カキ}研^{カキ}せ^{カキ}ラ^{カキ}レ^{カキ}シ^{カキ}ト^{カキ}

銘^{カキ}あ^{カキ}り^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}尋^{カキ}あり^{カキ}し^{カキ}小^{カキ}無^{カキ}銘^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}尋^{カキ}あり^{カキ}し^{カキ}小^{カキ}無^{カキ}銘^{カキ}

昔^{カキ}より^{カキ}今^{カキ}迄^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}傳^{カキ}へ^{カキ}る^{カキ}所^{カキ}に^{カキ}あ^{カキ}り^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}傳^{カキ}へ^{カキ}る^{カキ}所^{カキ}

實^{カキ}ハ^{カキ}豊^{カキ}後^{カキ}行^{カキ}平^{カキ}の^{カキ}銘^{カキ}は^{カキ}明^{カキ}く^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}明^{カキ}く^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}明^{カキ}く^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}明^{カキ}く^{カキ}

深^{カキ}殿^{カキ}の^{カキ}事^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}天子^{カキ}書^{カキ}は^{カキ}法^{カキ}府^{カキ}の^{カキ}所^{カキ}に^{カキ}あ^{カキ}り^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}天子^{カキ}書^{カキ}は^{カキ}法^{カキ}府^{カキ}の^{カキ}所^{カキ}

に右の所翹を垂るる有書の時々の所劔と号する
別殿へ今やうも耐ハ内侍の所翹を持て所供は
きりかへ行平の作を用らるる六代出来しもの
古代の登の時々の所翹ハ乱世ハ紛々せしむる
酒井氏本所翹は尋ねれしは古物也せし中酒井氏候
せしれし
酒井氏守忠書武を好し
人也西丸若年寄を執り

一 葬禮の供の人のきし腰刀 短く深みき
刀の多し 白箱の袋に入也
袋と云ハ鞘袋柄袋之白箱をききし結ひしむる
町記ハ將軍義量公薨涉應永三十^甲辰年二月廿九日於
等持寺火葬のりを記しる条ハ彼人<sup>善白直繼之
コヒタカウヨリ</sup>

ワラシガラハクと見えしを母は戸を武家ハはるあり町人
刀箱ノ袋ニ入ル
の葬禮ハハ服差の柄を白紙にて包てきすハかの結の袋は
入る様風の強り傳りしるあり
と母町ハの刀の柄を紙に巻き
笑ハ人あれし古風の強き

一 武雜記ハ太刀の帯取のり啄木ハ不可然也但近年啄木も
逢上ハ略然といぬたうの帯より本候ししは
まじハ啄木ハ本式ハ非きしとす内代も啄木本式上古より
用<sup>啄木ハ平
紐の結</sup> 拾遺集の神樂歌ハ「いそのうらや男
の太刀もうらやその結志てく官がうらやん
一兼兼良三澤塵
愚抄ハいそのうら
やハ大和國多留と云所の名也そはある男を云あり古きをこして
年老るるといふやその結ハ太刀の帯取のりといふもあつるを云ふや
ハいその結ハ此の結ハいその結をいふもあつるを云ふや

或書は柄の長さは三人立て耳の下のより是の如く此の
 長く云は新太刀も長巻ともいふ戰場を人馬の足を
 かくりたき倒れおし切多きをまきせられぬを磨くに
 及せりしやもあきし柄を長く片手巻より柄巻
 とも云ふ石突あり 薙刀は
列あり

一 野太刀ハ右より云く。長太刀の如く

一 糸巻太刀ハ柄下令襦袢ありて巻て糸糸ハ平紐之令具
 皆糸柄ナリ地之カブト金サルテ何リサルテは徳を通す黒皮之
 ウデヌキ何多べ。目貫具家の紋ゆきつけ襦袢も金度懐
 を掛け葵襦袢家の紋を金と付し之鞘黒塗家の紋を付

也帯取の柄口より二ノ足まで柄をひたす切れをひけし
 其上を柄と同一糸を渡り巻をまきしセメカ子三ノ帯
 取ハ啄本又ハカンタウニタクボクの時ハ帯取足間ありあ
 を思はるし紐ひらむし芝引モヨセ何り是を糸巻
 の太刀と云也武太刀ハ軍陣よりく太刀也

一 武太刀と云ハ軍陣よりく太刀の惣名之装束の時より傍
 太刀前縁太刀衛府太刀ありは紐とぬる武太刀と云

一 草巻太刀 カハマキ
皮畏又草畏
同シ草ナリ 鞘をふゆ草を包む紐ひ
 らくする太刀之皮の上は金物何り柄鮫黒塗之皮の上は
 何り巻何り唐富記巻七文安元年八月一日丁未ハ執事礼

貞丈云黒太刀ト云
ハ柄サメヲカケテ
黒クスル柄マカス
目貫家ノ紋焼付
也サマクロヌリ家
紋ヲ付ル也金具
皆赤銅ニテナコ
地ナリ鐔ハアノヒ
ツバ赤銅家ノ紋
付也帯取赤銅シ
ヤウブ革タタカ
ノ時ハ足間ニラタ
ル所ヲ黒皮ニテス
ヒクム也是ヲ黒太
刀ト云又黒作ト至
同シ事也

貞丈云白太刀ト云
ハ柄サヤ銀ニテノシ
付也ニテ付ト金柄
ギンノ折サニテ柄
巻ズ目貫キンニテ
家ノ紋ヲ付ル鐔ハ
葵ノバギン也家ノ紋
ヲ付ル鞘モ銀ニテ
包ミケボリ家ノ紋
アルヘシ金具皆キン
ニテケボリ有帯取
シマウブ革タタカ
ノトキハ足間ニラタ
ル所ヲ白地ノ銀欄ニ
テ縫ヒクム也是ヲ白
太刀ト云

進上官涉方涉劔一腰皮裹き 那源と一宗高う太刀
今も那源の家を傳へて在る草包の太刀也

黒作太刀と云ハ涉成身故家ト云黒作太刀と申の端也
ぬりつむるとい合具も赤銅とい塗合具といもせやを
ぬりもやつゝふさめるとい糸といも草といも巻といも
かひらうハ名やうハ草たうといはれは是も草といは
い是を黒太刀と申し

白太刀黒太刀のより宗五大双紙と云宗五大太刀といひらのより
單の巻巻又下といひらの白きを腰より上とのりをこき
しく巻きまいて黒をぬく中黒をきいた太刀ハ白太刀といつ

きやとも白貞丈云白トハ銀つゝ銀の折きあるのありあ
きやとも白貞丈云あるのありあ又折きいた太刀ハ黒太刀といきや
ぬりかといつゝあきめをいふて黒くぬりかあど志やうといけ
がうけがり ぬりかた下目貫我家の紋をきつけた
ま下帯といふ志やうハ草是あいといふもまのぞ巻を
くら太刀といふぬき入といふはあといきとた村太刀
折刀といふぬき入といふは

本阿弥の刀劔の目利ハ撥治の正作う否を目利するあり
け刀ハ快く骨の切きや否を目利するハ本阿弥の目
利を担れ付る正作ぬき骨の切きするもあハ研を

う研く時又鉄の鞆固くしてたすき研かきし後熱湯
 漫く又火葉火く焙りて研たる刀之本阿弥をいれをんり
 半あきりた又八尾あて知れぬる知ぬわつと極れを出
 せられあつて又兼しき物をも祝合を望のめく物せば正札の
 極れをききて畢竟極れハ刀を賣る付の極極は出るもの
 半よし実用よい立めく切て試み能く骨の切る刀を定ま
 せし一本阿弥が極れを頼まきしといひ
 一 近比^{セサウ}劔相^{セサウ}のなるもあつたりも刀の音凶を定めき
 るあゝ應不相應を言ひ考へて何の益もあきりぬれぬ物
 いひしき人あつて甚信作らるる心正真すて躬の行正

しき人の凶刀を常るといふも福を心形曲ると躬行正
 ぬきり人の言刀を常るといふも福を心形曲ると躬行正
 天命之刀劔ふとの関^{アガ}るるあつて只心術躬行の正形より
 て吉凶禍福を招きあふ

一 今世の古ハツカ刀^{古ハツカ刀} 服差^{古ハツカ刀} 乃両刀を相添く

吉の時代戦國の時より始まるて或書^{古ハツカ刀} 肥前國就
 造寺^{大名の}太閤一際系して此國は好り美造一何といひ
 たり時秀を言ふ就造寺より作らるると對面之我等より
 種々の伝道具見せしこと則就造寺を連え美

大小ラサ事太
 田備中守作信
 長記天正六年
 十月廿四日條信
 長公ヨリ御太刀
 拵ノ御腰物并
 御馬皆具共二
 拜領云々此頃
 ハヤ太刀拵ト云
 名目アリ

ものこされいむしう獲のまむむの并多く左方ひきく
そ外又尤吉たうあふよそのひきくし又字あるを
あふとそ是と押してあふく刀乃名みくし刀
の植の事あるを

一 雪の下のおびらりの半雪の下と云緒古く外國より渡
し物と地合はんとあつゆのぬくは横筋をあふくと織
しとそい茶葉黄白横色を文とそ又ハ茶葉黄
横色も織たるありけ緒とそあびらりを作りしを云と母
葉入の袋あふよまを雪の下と云切とハ別と

一 太刀お刀の澤透スカシのり其初ハさうあふとれと元龜

池田勝入天心十二年
四月廿日於尾州長久
手永井傳八郎討取
也于時勝入四九才ト
云并アハ天文五年
ノ生レ也依テ考レハ
元龜天心ノ比ハ透
鐔アリ也
塚原ト傳百首天
永録頂鐔ハタ切
ノ人又キアルヲ好ムヘシ厚
ク無故ニカキキラ
ヘリ此哥ニヨレハ天
文永録ノ頃ヨリマ
アリシナルニヤ

天心の比より透スカシもありあふとそ或人云信長公の太刀澤は
透スカシありと云又水井鞆負花は池田勝入の太刀澤ハ
角ハ所透スカシあり一説ハ赤山義政が好給ひしより始
まりと云りされと母多旧記ハ不見ありあふ澤は
ぬく元龜天心の比ハさや何とあふと

一 太刀のり貞順故実集云太刀ハ鞘を青漆ぬきん
ハ重く是本或はかくハ裏ヤハさうとそこれハ一
の方ハ并斗トとそきれハ小刀と并西あふと
ハハ依トあふとそなり

一 三所あのみサは目貫并小刀ハ三糸掛トるを三所あト唱

祐乘ハ東山殿
時代ハ永正九
年五月七日卒
歳七十三代目
光乘ハ元和六年
三月十四日卒歳
九十二

此名目古代はついでとて條々けりある云云方格の腰
の糸目貫丸の角つが相焼付の并志やどうみ焼付
又極の内を右の糸目のみあり相を焼付の小刀
つうこうぬるんありきき此目貫の并ハ相目取の付
しりき 匠せうの小刀相の妙法匠をききされが古代目貫と
并ハ同格ありしあれと小刀ハ別ありし既ハ後辰
家ハ祐乘宗乗乗真以之代の作目貫并と一品
掛ハいもハきくまうりしつう光乗よりハ来ハ目貫并
小刀ハ掛ける品出たりしと云説ありされハ元龜天正元和
の以や之ハおあしありし

平宗物性云
小招内府評判
糸ニヤウギタイ
ハイ云々又持巻
秘抄鞠ノ糸ニ并
配云々大草類科
類書ニ云危丁并
拜云々

武藝之部

一 躰拜タイハイと云事ハ大的のふ限も大追物の躰拜並態の躰
拜やそのの躰拜とも云又寶亨兵艦ハの帯佩とも書ハ
里躰拜ハ射禮法或のるそその世正月上日涉う場始の大
的のるを躰拜的といふ人あり何やまうこ此う場始の大的と
云る布文之又大宗物といふ人ありいりあやまうこ太平的と
いふ人ハ一向あき名目也きして何藝といふもそ藝の裁
をせりも躰拜と云ん

一 正月は弓場始の天的の射弓太郎の
弓太郎トハ初一番大前ニ
如テ射ル人ニハ号上ノ名ニテ
此作 見矣天下泰平の矢之才矢の國土安穩の矢之されハを
 射をんしてハ凶ると云況あり天下泰平の矢國土安穩の矢
 あると云るいしハ其妙はあきるよし古傳の書ハいふさ
 るその矢ありてもも守れても古凶ハあきるこ也の射
 手六人射より天下泰平國土安穩あるよりそハ後依ハ
 射させしるこは祈禱の爲ハあるまハ祈禱ハ射ら
 るを奉射の天的と云は時ハ幸ハよりん古凶をもこ
 る何ハき然然れもさうのるハ古凶をいしをぬお
 あり保つて

賭射ハ賭物ヲ充
 右ニツク置テ充
 方勝テハ右ノ方
 ノ賭モ、ヲトル右
 ノ方勝テハ左ノ方
 ノカケ物ヲトル
 後世ノカケ的モ
 是ヨリ起リタリ

昔ハ賭射と云るを今ハ的と云賭の字をうけおと
 よとそかけしと射多古ハ弓矢弦のかけおとをうけ
 物又出後ハ多目をも出す可ありたるとそ今ハ多目
 ハ多ハ及金子あをを出し辨ねハかまハすしてこハ
 き射やをて中をもさしかけ物をぬるをさし
 としと情楽の射ハありた
 一 犬の射と旧記ハあるハ犬追物の射といふ
 一 大具是ある射ハ小具是ある射と云る旧記ハ云
 大具是あるとハつとぎ弓をひく射ハ小具是とハ弓
 して射の射手をさしつとぎ弓あれハ矢もめく

よハ弓あれば矢もむくころハ具足と云ハ射手具足と云
射手の持ち道具の事弓矢を云

馬上のニウおと云ハ流痛馬笠掛犬追物之武雜記云ニウお

乃拵と云ハ流痛馬小笠懸口傳小字除テ
見一平小字ナ犬追お之志るるを近代

ハ中級さめ稀ある百犬笠懸歩射をニウおと云

カチタニ
歩立のニウおと云ハ大的草鹿お之拍済といハ保より云

ニウおと云ハを射するといハ右の馬上歩立のニウおを云

五ッおと云ハ武雜記云をぬきめ笠懸犬追お歩射を是を

五ッおと云と何うされもいハ四之歩射と云ハ大的小的

を云うされハいハ歩射又ハ笠懸小笠掛をぬきめ犬追お

歩射を云うおと云ハ

ブシヤ
歩射と云ハ騎射を射して是をいハり云う射ハ大的

小的草鹿園おとの惣名之又歩射とハ別之

キシヤ
騎射と云ハ歩射を射して是をいハり云う馬上下射ハ流痛

馬笠掛小笠懸犬追おとの惣名之何れとも上より射を

是之享保以来將軍家より騎射と名付てさしりたり

狭おを云ふよまてあづりの赤くぬりたる笠をききて小笠懸

うけきよとて馬をうけ是より射ハるは古代ありまのりて享

保の將軍家の所作りお也其式を定て小笠原家ハ此類

けありて法より教へてせ給ぬ

一 ^{グシヤ} 奉射と云ハ非幸ニ大的を射多を云射子五人之少射とい
 一的の傍ニ馬等痛をニ寄ふ出志中の痛を一馬と云之
 の痛をニ思と云又其外の痛をニ思と云是中古其
 の初之上古ハ内親次親外親と云内親式正月十七日觀射
 式ニスえさう親といハグシヤといの事又内院中院外院も
 云院の事ハ院文ハ周垣とある周垣といハかきをめぐらし
 とよそそ家のめぐらうは垣をめぐらしたるめ目的の面を思
 痛をめぐらす内院中院外院も上中下のあつるをを
 祿を預りしる後日本記の文武天皇天皇二年の記も一
 とう内親内院一馬之次親中院ハニ馬之外親外院ハ三

天子御湯を召の時
 ハ藏人等を召て
 弦をとり侍中
 群要ハ藏人非
 藏人取リ奉御湯殿
 奉仕鳴弦了
 源氏物語クハ母の老
 ハ云云をくすとま
 れがいかんちつち
 して元ハこれハ
 くれとおけやま
 このうやまのくま
 くらあつたれが
 さいとてんハハハ
 ちとてひあやう
 一とてあやう
 ちとてあやう
 いぬのせま

の馬といハ三重の痛をまゝハ上中下のあつるをを
 也後世ハ上中下の中を以て候
 一 ^{ノイダシ} 鳴弦の事ハ弦といつるをあらすと書く之上古ハつる
 堀河院沙在位の村おくおび元たさぎとせめなるあり
 ニ義家於臣南殿の大座はさうひて沙腦の刻眼
 鳴弦まのりニ皮の後言多ハ前の陸奥守義家と名
 奪られバつて人月の毛もさう沙腦をこつてせ給ひ
 ち平家お語は云えたり是もつてつれうちも鳴弦
 のはふといつるハあつとつゆめハ源氏物語もつる
 うちのさういさうり ^{タラハの} 是もつるハ外なるお語あるあり

真丈云上古ハ弦ヲ
鳴ラスマイゲント
云フヤ古以來イゲ
ノ法ナド、云々出来
リ法術ヲ行スハ神
主山伏陰陽師本
ノ類ニ似タリ武士ニ
ハ似合ハヌ度ナリ好
ムヘカラス



一 鳴弦と墓目ハ其法別ト云説阿ノあやまりノ鳴弦
の法ト云ハ必墓目ノ名ヲ射ルハ鳴弦の法ト云
墓目ノ法ト云モ同ク又一説ハ鳴弦ハつるオチ
如顯ト云ハ墓目ノ名ヲ射ル法を云明クモ
顯ハすと云心ニ云ハ真丈揚ルハ顯ノ二字を用ふる
ウチを鳴弦といふヨシキレハ又字を著ウレハ
一 明クモウチを顯キアズルハ一説ありた弦オ
モウチを鳴弦トシテハ一説ありた弦オハ
鳴弦の法ト法ノ字を付シトベシキレハ一説ありた弦オハ

